

「万引きをしたら、推薦できないのか」

2016年03月16日

広島県府中町の町立府中緑ヶ丘中学校の3年生の男子生徒が、1年生の時に万引きしたことがあるので、志望校の推薦状を出せないと言われ、自死したというニュースが報道されている。担任教諭は生徒に「万引きがありますね」と聞いたところ、「えっ」という反応だった。「3年の時ではなく、1年の時だよ」と確認すると「あっ、はい」と答えた。担任から万引きの事実を親に報告すると言われ、その数時間後に、自死したという。自死後、調査したところ、万引していなかった。誤った記載に基づいて、推薦できないと、生徒に伝えられた。生徒は「先生に話しても、分かってもらえない」と言っていたとも報道されている。こんな残酷なことがあろうか。生徒の苦しみ、ご両親の悲しみを思うと、怒りが沸騰する。教諭は、生徒に対し強い権力を持っていることを知らず、何より、生徒の立場に立って理解しようとしていない。

学校側は記載を訂正しなかったことを謝罪している。町の教育長も「生徒の不明確な発言で万引きの事実が取れたと思ってしまった」と述べ、「学校側に責任があった」と陳謝した。学校側は、一人の生徒を死に追いやったのだから、取り返しのつかないことをしてしまった。学校への非難は言うを待たない。

しかし、「万引きをしたら、推薦できないのか」と問いたい。子どもは過ちや間違いをする。その間違いや過ちを正そうとすることが教育である。仮に万引きをしたとしても、「今は更生して、真面目にやっています。自信を持って推薦します」と、なぜ書けないのか。2年も前のことを持ち出して、推薦できないというのは教育の放棄である。学校は、それほど生徒に対し不寛容なのか。啞然とする。

子どもには反抗期があり、社会的に反することをやってみたいという冒険心も持っている。その反抗、冒険心が成長のバネになる。一回の間違いで、子どもの将来を閉ざす教育など、あってはならない。人は様々な失敗を経験しながら、共に生きる社会のあり方を学んでいく。子どもの過ちや間違いには寛容であっていい。大人が子どもを包み込んで、成長を促すのである。

親や教諭の言うことをよく聞く品行方正な「良い子」にむしろ問題があるのではないか。そのような子どもは、時流に流され、自分で考えず、大人の顔色をうかがう人間になっていく。社会的に地位を得た人々の反社会的と思える事例をイヤというほど、聞かされている。その人々は子どもの頃、「できる子、良い子」を通してきたのではないか。躓くことなく、チャホヤされて成長した人は他人の痛みを理解することができず、自己中心になり、自分の利益と栄達を求めて平然としている。社会的弱者を無視し、顧みない言動は明らかに反社会的である。それらの言動に対し咎めようとせず、極めて寛容である。このことの方が大きな問題である。

学校側は記載を訂正しなかったことを詫びるのは当然であるが、詫び切れるものではない。そして、教育を放棄した事実にしっかき目を見開いてほしい。推薦状に過去の過ちを書く必要はない。「学校として、責任を持って推薦します」と書けばよい。学校は、子どもを潰すためではなく、あらゆる可能性を引き出し、広げるためにある。

生徒の自死にいたたまれない思いである。同時に、小さな過ちに不寛容で、大きな犯罪を咎めない風潮に社会の歪み、荒廃を見る。キリスト教信仰の核心は「赦し」である。赦されているから、立ち直っていけるのである。